

## 二 戦後から六〇年代の体育会

### ◆全名大への合流

一九四七（昭和二二）年、名古屋帝国大学は名古屋大学と名称をあらため、翌年に法経学部と文学部が設置されました。また一九四九年に医学部、工学部、理学部、法経学部、文学部、教育学部からなる新制名古屋大学が設置されました。それと同時に第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校、名古屋大学附属医学専門部が新制名古屋大学に包括されました。これによってそれぞれの運動部は新制名古屋大学として合流することになり、公式大会においては旧制名古屋大、八高、経済専門学校、岡崎高師が全名大として出場することになりました。

名古屋大学は、名城地区、東山地区、鶴舞地区、瑞穂地区、高蔵地区、豊川地区、滝子地区、安城地区にキャンパスが分散していました。教養部学生は、一、二年生を滝子地区と豊川地区ですごし、三年生になるとそれぞれの学部のあるキャンパスで生活をしていました。名古屋大学は、東山キャンパスへの集結を計画し、一九五九年には経済学部と法学部が、一九六二年（昭和三七）年に文学部、一九六三年に教育学部、一九六四年に教養部と本部が東山キャンパ

スに移転しました。

#### ◆名古屋大学体育会の結成

名古屋大学体育会は、個々に活動していた各運動部のとりまとめ役的連合体として一九五六年五月に結成されました。当初、体育会は、大学の公認団体ではありませんでした。しかし五年後の一九六一年に基盤の拡大や資金面の支援要請をめざし大学から公認を受けました。

名古屋大学体育会の目的は、「会員の体位の向上、スポーツマンシップによる人格の陶冶、及び会員相互の親睦を図ること」にあります。その目的を達成するために体育会は、「会員一般へのスポーツの普及に貢献する事業」、「学内運動競技会の開催」、「運動部活動及び対外試合」、「その他、本会の目的を達成するために必要と思われる事業」を実施しています。

また名古屋大学体育会は、『濃緑』という機関紙を発行しています。以下では、この『濃緑』をもとに現在までの体育会の歴史を紹介しましょう。

#### ◆活躍する運動部

多くの運動部は、一九四九年に新制名古屋大学になると同時に創設されました。なかには、名古屋帝国大学以外の運動部の流れを引き継いだものもあります。硬式野球部は旧医科大学を主

表1 名古屋帝国大学・旧名古屋大学の運動部

現在の名称	母 体
漕 艇 部	愛知医学校に明治一八年に設立されたものを引き継ぐ
陸 上 競 技 部	第八高等学校、愛知医科大学に大正十三年に設立されたものを引き継ぐ
硬 式 庭 球 部	名古屋医科大学に昭和六年に設立されたものを引き継ぐ
ヨ ッ ト 部	名古屋医科大学に昭和八年に設立されたものを引き継ぐ
バスケットボール部	名古屋医科大学に昭和十年に設立されたものを引き継ぐ
ラ グ ビ ー 部	名古屋医科大学に昭和十年に設立されたものを引き継ぐ
サ ッ カ ー 部	昭和一四年設立
軟 式 庭 球 部	昭和一六年設立
バレーボール部	昭和二〇年設立
硬 式 野 球 部	昭和二三年設立
水 泳 部	第八高等学校から昭和二四年に引き継ぐ
馬 術 部	医科大学から昭和二四年に引き継ぐ
山 岳 部	医科大学から昭和二四年に引き継ぐ

体に創立され、愛知大学野球リーグの主導的役割を担っていました。そしてリーグ開幕と同時に優勝をはたし、東京六大学や関西六大学のチームにもひけをとらない実力を持つていました。

サッカー部は、一九六〇（昭和三五）年の朝日招待サッカーで、当時大学選手権を制した八百樫選手らの早稲田大学サッカー部に二対〇の勝利をおさめています。陸上競技部には、一九六五年度の全日本陸上十種競技七位の成績をおさめた学生がいました。硬式テニス部は一九六四年まで一部リーグで優勝し、全国大学王座決定戦では連続第三位の実力を持っていました。その後も二〇年間一部リーグ二位の成績を維持しています。ヨット部は一九六六年、イン

カレで準優勝を果たすほどの実力を持っていました。卓球部は二部の東海リーグ一部リーグ復帰を目標に活動し、バレーボール部は東海学連の一部リーグに所属しています。柔道部は学生柔道東海地区でベスト四に入り、バスケットボール部は東海リーグ二位の成績でした。

◆ 「運動部の体育会」から「会員みんなの体育会」

一九六〇年代後半、体育会の性質は「運動部の体育会」から「会員みんなの体育会」へと変化してきました。背景には、吹き荒れる大学紛争や学生運動に参加する学生とスポーツに熱を入れる一部の運動部員との関係の乖離かひりがありました。また当時の体育会委員長も、多くの会員のいる体育会が、一部の運動部員だけで構成される委員会によつて物事が決められていくことに問題点を感じていました。

そこで体育会では、一般会員の参加する各種スポーツ大会、講習会、運動会、駅伝などを開催して、運動部に占有されているように誤解されているスポーツを万人に解放し、一般会員がスポーツに親しみ、身近にスポーツの存在を感じる事ができるように活動をめざしました。しかし一般会員への連絡組織がないことや、一般会員には体育会活動への発言の場がないことから、十分な成果を上げるにはいたらなかったようです。

#### ◆一般会員へのスポーツ普及活動

体育会は、会員だけをみれば名大生の九割以上からなる組織でした。しかし体育会に入会しても運動部に所属しない学生が多いのが実情でした。そこで体育会は、これらの会員へのスポーツ・運動の普及策としてさまざまなとり組みをおこなってきました。

一九六〇年代後半には、クラス委員制度を数年計画で確立し、将来は教職員をも含めた全学のスポーツ組織を確立しようとする方向が模索されました。しかしクラス連絡委員制度は立ち消えとなり、一九六九年には新にクラス体育委員が発足しました。しかし大学紛争による本部封鎖などの学内の事態が学生の関心をスポーツから遠ざけることとなり、このクラス体育委員会も自然崩壊しました。

#### ◆大学紛争と体育会

一九六八年の東大紛争以降、名古屋大学も紛争が吹き荒れます。名古屋大学体育会は、スポーツの組織のなかに政治思想をもちこみ行動することはやがて対立・内部崩壊を招くことになるとして、政治運動とは一線を画していました。しかし体育会には、それまであまり関与しなかったカリキュラム問題や大学運営への学生参加の問題などに対して、体育会の立場で取り組み、課外活動のあり方や大学内での位置づけなどを追求してゆきたいという考えもありました。

一九六八年の『濃緑』は、体育会と政治的活動にもふれています。そのころの体育会は、文化サークル連盟、名大祭本部実行委員会、自治会とともに学園政策委員会を構成していました。一九六八年度には部室設立運動を実施し、武道館関係クラブ、応援団の代表が武道館設立準備委員会を組織し、二階建ての武道館建設を要求しました。また蓼科高原気候医学研究所跡に建設される宿泊施設に対する要望事項をとりまとめる「蓼科高原山の家委員会」も組織しています。さらに課外体育検討準備委員会をつくり、学生部長と学部代表教官からなる体育委員会に常時三名の学生代表を参加させていました。

### 三七〇年代の体育会

#### ◆体育会と学生スポーツの変化

一九七二年山岳部は、現役学生四名を含む七名の西ネパール遠征隊を派遣しました。ジェイ・ボウラニ峰（六九四〇M）の頂上には到達できなかったものの、現地名の確認、地図の訂正などの成果をおさめています。しかし七〇年代になると中部地区の私立大学運動部の実力